

## 「二つの兄弟」

マルコ 1:19~20

### はじめに

聖書は神の御計画を記した書物です。しかし一見するとそこに記されているのは、そのほとんどがある人（あるいは人々）が何を言い、何をなし、そしてどうなったかという結果、出来事すなわち人の記録、人の歴史です。つまり神の御計画はこれらの出来事、歴史を「型」に表した書物、言うなれば実際に起こった「たとえ話」なのです。聖書に記された一つひとつの出来事、事実はただそこに記録として記されているのではなく、別のメッセージを秘めてそこに存在しているのです。そのメッセージこそが神の御心、御計画を指し示しているのです。今日もマルコの福音書から一つの出来事をご紹介します。それをただの出来事としてではなく、そこに秘められた、その事実の中に表された神の御計画を探し求めて読んでまいりましょう。

### 1. 網

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:15 「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」

1:16 イエスはガリラヤ湖のほとりを通り、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師であった。

1:17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」

1:18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。

イエシュアは、御自分の弟子として多くの漁師を選ばれました。イエシュアの 12 弟子のうち、少なくとも 7 人は漁師であったことがヨハネの福音書 21:2 に明記されています。その理由、意味については前回お伝えしましたが、補足としてこの漁師たちが使う「網」についても述べておきたいと思えます。これをヘブル語でミフマル(**מִיְמָר**)と言います。この中にハーマル(**חָמַר**)「慕う、熱くなる」という意味の動詞を見つけることができます。この言葉が聖書で最初に使われた記述から、その本来の意味を考えてみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

43:29 ヨセフは目を上げ、同じ母の子である弟のベニヤミンを見て言った。「これが、おまえたちが私に話した末の弟か。」そして言った。「わが子よ、神がおまえを恵まれるように。」

43:30 ヨセフは弟なつかしさに、胸が**熱くなって**泣きたくなり、急いで奥の部屋に入って、そこで泣いた。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブの12人の息子たちの物語の一場面です。11番目の息子ヨセフは誰よりも父に愛され、また自分が王になるような夢を見たなどと告げたことで10人の兄たちから憎まれ、奴隷としてエジプトに売り飛ばされてしまいます。ところが神は不思議な方法でこのヨセフをエジプトの総理大臣（宰相）、王に次ぐ地位にまでされ、彼の見た夢は現実となります。そうとは知らない彼の兄弟たちは、ヨセフの命令によって彼の弟であるヤコブの12番目の息子ベニヤミンを連れて来ます。ここで「ヨセフは弟なつかしさに、胸が『**熱くなって**』泣きたくなり」という部分に、聖書で最初のハーマルがあります。「弟なつかしさに」とはパーカシュ(**צַרַּר**)という動詞が使われ、直訳すると「弟を慕い求め、探し求め」となり、ヨセフがいかに弟を見ることを切望していたかが表されています。このようにハーマルとは本来、胸が「熱くなる」ほどに兄弟を強く慕い求めることを指し示しており、それがミフマール「網」という言葉に込められたメッセージであると考えれば、この「網」を使う漁師たちに目を留められたイエシュアの真意の中に、自分の兄弟すなわちイスラエルの民を慕い求め、また探し求めるといご自分の働きが指し示されていると考えることができます。すなわち以下に語られているとおりです。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

15:24 イエスは答えられた。「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」

このようにイスラエルの民を慕い求め、探し求めておられるのはイエシュアだけではなく、イエシュアを「遣わされた」御方、すなわち天におられる御父である神こそがそうであると言えます。その事実、真実が、前回の「シモンとシモンの兄弟アンデレ」という漁師たちに引き続き、今日紹介する「ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネ」という漁師たちにも表されています。では見てみましょう。

## 2. ゼベダイの子

1:19 また少し先に行き、ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネをご覧になった。彼らは舟の中で網を繕っていた。

もう何度もお伝えしていることですが、聖書に記されていること、イエシュアの語られること、またなさることに偶然やたまたまというものはありません。聖書が神の御計画の書物である以上、記された事実のすべてが必然であり、そこには何等かの意図、すなわち神の御心、御計画が表されているのです。ここに「ゼベダイの子ヤコブ」、そしてその兄弟「ヨハネ」という人物が登場し、イエシュアは彼らを「ご覧になった」、目を留められたと記されています。当時ガリラヤ湖周辺には数多くの漁師が働いていたことでしょう。ですからその中からイエシュアは彼らを選ばれたと言えます。ではなぜ彼らだったのでしょうか。彼らでなければならなかった、「ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネ」が選ばれた必然性とは一体何でしょうか。その意味を考えてみたいと思います。

まず「ゼベダイの子ヤコブ」について。前回登場した「シモンとシモンの兄弟アンデレ」とは明らかに紹介の仕方が異なります。つまり「ヤコブ」そして「ヨハネ」には、シモンとアンデレについては記されていない父親の名前が、「ゼベダイ」という名の父がいたことが示されています。ゼベダイ(זְבֵדַי)とは「授ける、与える、賦与する」という意味のヘブリス語ザーヴァド(זָבַד)という動詞の派生語と考えられます。この動詞は旧約聖書で一箇所しか使われていません。

【新改訳 2017】

創世記

30:19 レアはまた身ごもって、ヤコブに六番目の男の子を産んだ。

30:20 レアは言った。「神は私に良い賜物を下さった。今度こそ夫は私を尊ぶでしょう。彼に六人の子を産んだのですから。」そしてその子をゼブルンと名づけた。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ（イスラエル）とその妻レアとの間に 10 番目の息子ゼブルンが生まれた時、レアが語った言葉ですが、ここで「賜物を下さった」と訳されているのが聖書で唯一のザーヴァドです。レアはこのザーヴァドによって「夫（イスラエル）は私を尊ぶ」と言っています。このようにザーヴァドとは、イスラエルに尊ばれる、讃えられることを指し示しており、つまり「ゼベダイの『子』」とはイスラエルに尊ばれる「御子」すなわちイスラエルの王としての神の御子イエシュアを指し示していると考えられます。

### 3. ヤコブ

そしてゼベダイの子「ヤコブ(יַעֲקֹב)」という名について。これは「押しつける」という意味の動詞アーカヴ(אָקַב)の派生語です。これが聖書で最初に使われた箇所から、その本来の意味を考えてみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

27:35 父は言った。「おまえの弟が来て、だましたのだ。そしておまえへの祝福を奪い取ってしまった。」

27:36 エサウは言った。「あいつの名がヤコブというのも、このためか。二度までも私を押しつけて。私の長子の権利を奪い取り、今また、私への祝福を奪い取った。」

これはアブラハムの子イサクの二人の息子、兄エサウと弟ヤコブ（後のイスラエル）の物語の一場面です。兄エサウは父イサクに愛された長男でした。しかし彼は愚かにも、わずかな食物と引き換えにその「長子」長男としての権利を弟のヤコブに売り渡してしまいます。そしてここでヤコブは、老年になり視力の衰えた父イサクを騙し、実際にその長男の祝福を兄エサウから「奪い取って」しまったことが記されています。ここで「押しつけて」と訳されているのが聖書で最初のアーカヴです。このようにアーカヴとは本来、「長子の権利と祝福」を「奪い取る」という意味があると考えられます。当時の文化において「長子」長男とはただ最初に生まれた息子というだけの存在ではなく、その家の後継ぎであり、父に次いで権威のある、重要な立場とされ、また遺産相続においては他の兄弟よりも二倍多く受け取る

ことができる存在とされていました。「押しのける」アーカヴとは本来、その「権利と祝福」を「奪い取る」ことを意味していると考えられます。そしてその「権利と祝福」の内容はイサクが語った以下の言葉に表されています。

【新改訳 2017】

創世記

27:28 神がおまえに天の露と地の肥沃、豊かな穀物と新しいぶどう酒を与えてくださるよう。

27:29 諸国の民がおまえに仕え、もろもろの国民がおまえを伏し拝むように。おまえは兄弟たちの主となり、おまえの母の子がおまえを伏し拝むように。おまえを呪う者がのろわれ、おまえを祝福する者が祝福されるように。」

「もろもろの国民がおまえを伏し拝むように…」このように、この祝福の言葉は、ただの一家の長男に与えられるようなものではありません。天と地とそこにあるすべてのものに崇められる神、王、支配者として祝福です。アーカヴの派生語「ヤコブ」という名前には本来、このような「権利と祝福」を受け取る、獲得するという意味があると考えられ、イエシュアがそのヤコブを「ご覧になった」目を留められたという行為の中に、御自分が天と地とそこにあるすべてのものを治められる神、王、支配者となられることを指し示していると考えられます。

このように、「ゼバダイの子ヤコブ」この名には

①イスラエルの王としての存在と、

②天と地とそこにあるすべてのものを統べ治める神、王、支配者としての存在

が指し示されており、それをイエシュアは「ご覧になった」と考えられ、御自分こそがそれであることを指し示しておられると考えられます。

#### 4. 兄弟ヨハネ

そして「ゼバダイの子ヤコブの兄弟『ヨハネ(יְהוֹנָן)』」について。この名の意味については以前にもお伝えしましたが、ハーナン(יְהוֹנָן)という動詞から「恵む、あわれむ」という意味があります。その最初の言及から、本来の意味を考えてみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

33:5 エサウは目を上げ、女たちや子どもたちを見て、「この人たちは、あなたの何なのか」と尋ねた。ヤコブは、「神があなた様のしもべに恵んでくださった子どもたちです」と答えた。

これもまたアブラハムの子イサクの二人の息子、兄エサウと弟ヤコブ（イスラエル）の物語の一場面です。長男の祝福を奪った弟ヤコブは兄エサウの怒りを買って、故郷のカナンを追い出されます。しかし長い年月を経た後、神の命令により帰郷します。一度はヤコブの命を狙うほどに彼を憎んだエサウでしたが、彼の前にひたすらひれ伏す弟ヤコブを、抱きしめて泣くほどにこの再会を喜びます。そこでヤコブは異国の地で得た自分の家族をエサウに紹介して「神が…『恵んでくださった』子どもたちです」と言

い、ここに聖書で最初のハーナンがあります。このようにハーナンとは本来、ヤコブの子どもたち、すなわちイスラエルの子孫、イスラエルの民を指し示す言葉であると考えられます。ですからイエシュアがこの「ヨハネ」を「ご覧になった」、目を留められたという行為には、イスラエルの王として、また天と地の王として以下の約束を成就させることを指し示していると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

これは神がヤコブすなわちイスラエルとその子孫に対して約束された御言葉です。「地のすべての部族」これはこの地球上に生きるすべての人を指すと考えられ、すなわちこれはイエシュアを王とするイスラエル王国を中心として、現在はバラバラになっている世界の国々を一つにまとめること、イエシュアを王とするイスラエルに全世界が従って生きるという世界、一つの巨大な国家が建て上げられるという約束、計画を表していると考えられます。このようにイエシュアが「ヨハネ」を「ご覧になった」目を留められたという行為はイエシュアがイスラエルの民と、その民に与えられた神の約束、御計画に目を留めておられることが表されていると考えられます。

このように、イエシュアは「ゼバダイの子ヤコブ」そしてその兄弟「ヨハネ」をご覧になることで、

①御自分がイスラエルの王、および天と地とそこにあるすべてのものの王となられること。

②アブラハムの子孫であるイスラエルの民によって地上のすべての人が祝福されるという神の御計画が成就すること。

に目を留めておられた、また指し示しておられたと考えられます。

## 5. お呼びになる

1:20 イエスはすぐに彼らをお呼びになった。すると彼らは、父ゼバダイを雇い人たちとともに舟に残して、イエスの後について行った。

そしてイエシュアは「ゼバダイの子ヤコブ」と「その兄弟ヨハネ」を「お呼びになった」とあります。どのように呼ばれたのでしょうか。ここで「お呼びになった」と訳されているヘブル語はカーラー(קָרָא)と言い、創世記 1:3 にその最初の言及があります。

【新改訳 2017】

創世記

1:3 神は仰せられた。「光、あれ。」すると光があった。

1:4 神は光を良しと見られた。神は光と闇を分けられた。

1:5 神は光を昼と名づけ、闇を夜と名づけられた。夕があり、朝があった。第一日。

これは神の天地創造の御業の第一日、光と闇についての記述です。ここで「神は光を昼と**名づけ**」という箇所に聖書で最初のカーラーがあります。「神は光を良しと見られ」闇と区別されました。このようにカーラーとは本来、ただ単に名前を呼ぶというだけでなく、神がご自分のものとして「良しと見られ」、その独断で一方的にお選びになり、他と区別する、聖別するという意味があると考えられます。

「ゼベダイの子ヤコブ」と「その兄弟ヨハネ」という名がイスラエルの王とその民、すなわちイスラエル王国を指し示していると述べました。神はアブラハム、イサクそしてヤコブ（イスラエル）と交わされた約束のゆえにこの王国を建て上げようとしておられます。アブラハムが正しかったから、イサクが賢かったから、ヤコブが美しかったからではありません。この王国はカーラーの本来の意味が指し示しているように、神の独断による一方的な選びによって建て上げられる、成し遂げられるのです。そしてこのゼベダイの子ヤコブとヨハネが、父ゼベダイと雇い人たちとから離して、分けられたことにもこのカーラーの本来の意味が反映されていると考えられます。そしてこれは神に選ばれたイスラエルの父祖アブラム、後のアブラハムがかつてこのように語られたことに起因するとも考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

12:1 【主】はアブラムに言われた。「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、わたしが示す地へ行きなさい。」

12:2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとする。あなたは祝福となりなさい。

「父の家を離れる」。アブラハムによって全世界の人々を祝福するという壮大な神の御計画は、彼のこの行為、この一歩からすべてが始まったのです。「ゼベダイの子ヤコブ」と「その兄弟ヨハネ」が「父ゼベダイを雇い人たちとともに舟に残して、イエスの後について行った。」という行為はこの御言葉、神の約束を指し示し、イスラエルの民に対する神の御計画を表していると考えられます。

## 6. 教会とイスラエル

こうしてイエシュアはガリラヤ湖の漁師であった「シモンとシモンの兄弟アンデレ」、そしてこの「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ」を選び出されました。イエシュアは他にも漁師たちの中から弟子を選ばれましたが、マルコの福音書ではこの弟子の選びに関する記述を彼ら二つの兄弟のことだけにとどめています。これは彼らが重要な弟子たちで、他の弟子たちはそうではなかったということではありません。それはこれらイエシュアが弟子を選ばれたことに関する出来事が、ただ単に起こった事実を記録として記しているのではなく、神の御計画が「型」となって示された出来事、言うなれば実際に起こった「たとえ話」であるということだと考えられます。すなわちそれは簡単に言い表すならば、前回述べた「シモンとシモンの兄弟アンデレ」とは、イエシュアに聞き従う、神の御計画に聞き従う、花婿イエシュアの花嫁となる「教会」を指し示し、そして今回の「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ」はイエシュアを王とするイスラエルの民、世界の中心となる「イスラエル王国」を指し示しているということです。



そしてシモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、合わせて4人だということ。これにも意味があります。聖書において「4」という数は東西南北の「四方」、また地の「四隅」と言うように使われ、全地、全世界を指し示す数と考えられます。つまりイエシュアは御自分が王となり、「イスラエル」と「教会」によって、この二つの存在を用いて全世界を祝福する、治める、支配するということを示していると考えられます。

そしてまたイエシュアがまず「シモンとアンデレ」を、そして次に「ヤコブとヨハネ」を呼ばれたという、この順序にも意味があると考えられます。つまりイエシュアは神の御子メシア（イエスはキリスト）であるという信仰は、初め「教会」に与えられ今日に至ります。一方アブラハムの子孫であるイスラエルの民、ユダヤ人と呼ばれる彼らにはまだその信仰が与えられていません。その信仰がないためにユダヤ人たちはイエシュアを拒絶し、十字架にかけることになるのです。しかし今日の箇所イエシュアが「シモンとアンデレ」だけでなく「ヤコブとヨハネ」をもご覧になり、そしてお呼びになったように、やがて必ず彼らユダヤ人がイエシュアに聞き従う日が来ます。その事実がこのようなたとえだけではなく、イエシュアの口からはっきりと語られたことが記されています。

【新改訳 2017】

マタイの福音書

23:39 わたしはおまへたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまへたちが言う時が来るまで、決しておまへたちがわたしを見ることはない。』

イスラエルの民、ユダヤ人が一つになって「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」と言うその時、イエシュアはこの地上に再び帰って来られます。その時「ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ」の選びの出来事に示された神の御計画は成就します。マルコの福音書がイエシュアの弟子選びの出来事をここで一旦終わらせているのは、これが神の御計画の完成、完了を指し示しているからだと考えられ、このゴールを「ご覧になって」見つめて、目指して、イエシュアは、神の御計画は進んでいるということが指し示されていると考えられます。

このように、神が、イエシュアがその御計画において「ご覧になって」、目を留めておられるのはこの二つの兄弟に指し示された「教会」と「イスラエル」という二つの存在だけであるということが、このイエシュアが弟子を選ばれた一連の出来事に秘められた、「型」として表されたメッセージだと考えられます。

私たち「教会」は、一見地理的にも人種的にも遠く離れたこのイスラエルと、私たちと何の関わりがあるのかと考えてしまいます。しかし私たちが信じる神の御計画は、イエシュアの眼差しは彼らイスラエルの民を捕らえて放さないのです。彼らとともにこの世界を祝福するということが神の御計画である以上、私たちがこれに無関心であったり否定的であったりすることは、神の御計画に聞き従っているとは言えません。ですからこれからますます神の御計画にあるイスラエルについての理解を深めていきたいと願います。聖霊の助けと導きがありますように。